

市街化履歴に着目した近世城下町縁辺部の形成メカニズムに関する分析と考察

-長野県松本市中央四丁目地区を対象として-

正会員 ○王 誠凱* 同 中島 伸**
同 児玉 千絵*** 同 森下 暢彦*城下町縁辺部 市街地更新 市街化履歴
街区 松本市

1. はじめに

1-1. 背景と目的

昨今、線引き都市計画が市街地の整備・更新・管理を担ってきたが、人口減少に伴う市街地自体の縮退や市街地内部から発生する空洞化現象を踏まえると、改めて面的な都市形態に着目する必要がある。そして20世紀には典型的であった市街地類型が近年様々な現在状況を生んでいることから、その場所性と時間性について分析することが重要になってくる。

また、現在の日本において、人口十万人以上の都市の半分は近代以前にできた城下町を起源としている。その多くは現在も都市の中心部として機能し続けている。一方、中心部から離れた郊外では、過去に大きな役割を果たしてきたニュータウンや鉄道沿線市街地などがインフラ基盤を保有しつつ、ある程度鮮明な都市像を有しているために、撤退あるいは持続更新の議論が活発で、既往研究も多く存在している。

その中で、近世から近代へ、特に城下町の基盤資源を有する都市で、中心市街地の密度が高まり、一定の期間を経て、中心部から離れた場所で計画的に開発される住宅地が多く出現するようになった。つまり、城下町を基盤とした中心市街地の成長プロセスは同時に縁辺部の形成過程でもある。城下町縁辺部では、土地利用の混在、城下町の基盤延伸、街区パターンの違いをはじめとする多様な文脈が存在しているものの、中心部と遠隔郊外の都市構造的な見方からすれば、見落とすことになる。実際問題として、過去に成長を遂げた都市とこれから縮退していく多くの都市では、城下町縁辺部はいずれもその最前線でありながらも、見えにくい性質や特徴の故に、なんとなく見慣れた中心市街地の一部として捉えられることが多い。

本稿では、これからの中心市街地整備・更新において、城下町縁辺部の更新可能性課題を検証するために、近世城下町縁辺部の形成メカニズムを具体的な事例によって分析しつつ、どのような流れでどのような空間が形成されたのを解明することを目的とする。

1-2. 対象地

本研究の対象地区としては、近世城下町の履歴を持つ都市で他の都市圏の影響が比較的少ないと想定される長野県松本市を対象とした。また、松本市は人口24万人超えの中核市であり、松本城を中心に形成された旧城下町では、町割りがきちんとなされていて、住宅・商業なども充実していることから、長期的な都市運営を推進する上で適

切であると考えられる。

2. 松本市における城下町縁辺部

本研究が対象とする城下町縁辺部は、次の定義とする。近代化以降城下町を中心から連続して拡大してきた市街地を2002年の旧版地形図に照らし合わせ、土地利用強度などから中心市街地化した部分を割り出し、城内、武家地及び町人地を除いたエリアを松本市の城下町縁辺部とする。

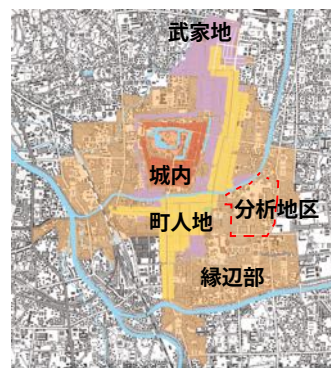


図1 松本市の中心市街地の構造

3. 分析地区：中央四丁目

3-1. 時間性：市街地化履歴

①城下町縁辺部の発生と成長：工場立地を中心とした変化



近代化に伴う工場の郊外立地



耕地整理をはじめとする土地改良による基盤整備・市街地化



戦後に本格的に市街地化が進行、町割りなどが完成



高度経済成長期に住宅需要増加、工場が撤退し、用途転換が始まると市街地構造が複雑化

図2 城下町縁辺部の発生と成長プロセス

②城下町縁辺部の成熟期：中心部としての変貌

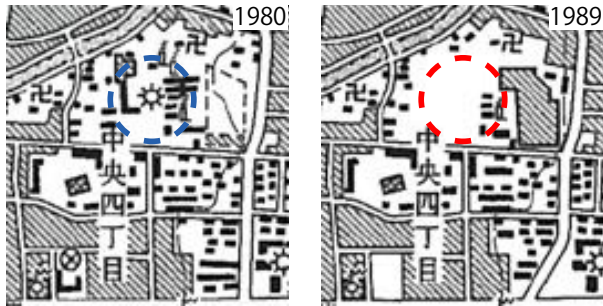
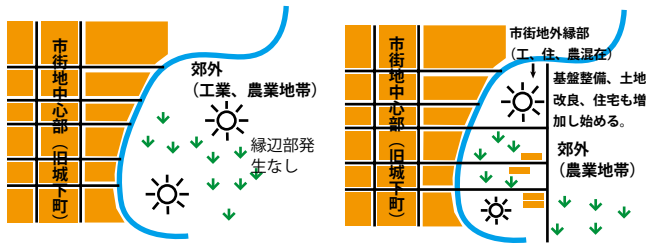


図3 産業構造転換による工場移転の発生

一、明治維新後 (1913～)

二、関東大震災後 (1927～)



三、戦災復興期 (1945～)

四、高度経済成長期 (1957～)

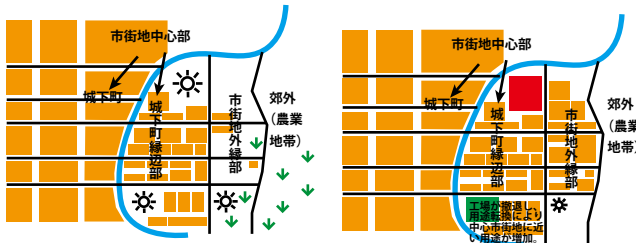


図4 城下町縁辺部による中心市街地構造の変化

城下町縁辺部の発生や成長により、中心市街地の構造にどのような変化を与えたのかという問題に対して、市街化履歴から読み取った内容を通じて、検討する。

明治維新以降、近代化に伴う工場の郊外立地がはじめると、それまでの城下町の周辺農地にて大規模な工場が連続して誕生する。この時点では市街地構造が単純で中心と郊外の二層構造である。昭和初期、耕地整理をはじめとする土地改良による基盤整備・市街地化が進み、郊外地域では住宅が整備され、市街地外縁部としての工業地帯が急速に成長した。戦後、本格的に市街地化が進行し、町割りなどが完成され、高度経済成長期に住宅需要が増加し、工場が撤退し、城下町縁辺部が市街地中心部に組み込まれ、旧城下町、城下町縁辺部、市街地外縁の三層市街地構造が確立された。

その後、バブル経済絶頂期を迎えると、大街区での大規模敷地の用途転換が起きると、城下町縁辺部における土地利用は郊外地域で見られる工業系から市街地中心部の商業系に変化し始める。その転換が完全に終わると、中心市街地の範囲が拡大し、経済成長と共に城下町縁辺部が成長する。

* 東京大学大学院 修士課程
 ** 東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻 助教
 *** 東京大学大学院 博士課程

3-2. 場所性：近代都市として拡大する以前のコンパクトさを示す境界線の役割



図5 近代化する以前の城下町縁辺部は既存中心市街地と異なり、スプロールであり、新しいまちである。

ここで読み取れるのは城下町縁辺部は既存中心市街地と異なり、スプロールであり、新しいまちである。まちの文脈としては、境界線にある寺や神社の向きが松本城方面にあることから、城下町で一旦まちが完結され、縁辺部は近代化の中で、近世とは異なる市街化論理で形成されたと考えられる。

以上より、場所性から見た城下町縁辺部とは、中心市街地内部のスプロールである。つまり、既成中心市街地の内部構造において、過去に近世基盤によって計画的に作られた城下町とは別に、近代化の過程で生まれた「発散」の計画思想に基づいて、城下町縁辺部は城下町のスプロールからなる現代の中心市街地の縁辺部として発達してきた。このように、中心市街地の内部でも、性質上は根本的な違いのある市街地類型が存在すると考える。

4. まとめ：城下町縁辺部の可能性

中央四丁目では、大規模な街区に残留した工場跡地は全て公共施設や商業施設に転換し、中心市街地の土地利用と似た構成で近年成長してきた。商業施設、住宅、公共施設などが立地し、土地利用も多様で混在している。縁辺部での混在は古くから城下町における住商混在の土地利用に強く影響されたと推測できるが、都市自体の縮退が始まると、縁辺部にある小規模な商業は衰退するか、中心部に集約するか、外縁部幹線道路沿いに移転するかのいずれかになることが予想される。その中でも基盤が城下町の延伸で脆弱な城下町縁辺部においては、小規模な商業が衰退しやすく、同時に住商混在のバランスが崩れ、空家も発生する。よって、このような縁辺部の複合開発を利用し、中心部住宅地のポテンシャルを保つことにより、中心市街地の活性化や縁辺部の高密度利用を図る必要があるこれからは課題としての基盤不良や小規模街区の空洞化などに対処すべく空間論的アプローチが期待される。

5. 主な参考文献

① 東京大学都市デザイン研究室：図説 都市空間の構想力学 芸文出版社 2015.9
 ② 密度を尺度とした市街地の変容過程に関する研究 (その1) 人口集中地区の変動過程の分析 佐藤 滋 戸沼 幸市 日本建築学会論文報告集 (302) pp.95-106 1981.4

* University of Tokyo Graduate School Master's Program
 ** University of Tokyo Graduate School Assistant Professor
 *** University of Tokyo Graduate School Doctor's Program